現代に生きる南仏詩人　テオドール・オーバネル
Théodore Aubanel, clairvoyant du Midi de la France

(1988年4月7日受理)

杉　冨士雄
Fujio　Sugi

Key words: テオドール・オーバネル，プロヴァンスの叙情詩人，少数民族の連帯意識(エスニック・アイデンティティー)

南仏プロヴァンスの最大の叙情詩人テオドール・オーバネル（Théodore Aubanel 1829－1886）は，処女詩集『笑み割るるざくろ』（*"La Miougrano entre-duberto"* 1860）の中（XXV）で，次のように歌っている。

「男であれ女であれ　この世に生を享けた者は，
　誰ひとりとして　日々に苦しみ，
　涙せぬ者はない。
　かりそめの喜びを味わい，死出の山路を登らんとして」。[1)]

それでは，果たして人生の最大の喜びとは何であろうか。詩人は同じ詩の中で，次のように歌っている。

「はかない人生にあって，
　まことの喜びは　ただ一つしかありません。
　神よ，あなたを愛することこそ
　無上の喜びなのです」。[2)]

しかも詩人オーバーネルは，造物主たる神から授かった，生まれ故郷プロヴァンスと，そこに育(はぐく)まれた女性を，こよなく愛して，次のように述べている。

「私にとって，愛することよりも美しく，気高く，崇高なものはありません。…私の言葉を信じて欲しいのです。私の心には，神と祖国と女性のそれぞれを愛する炎が燃えているのです」。[3)]

そして詩人の同じ考えは，次の詩の中に凝集されている。

「ああ，うまし故郷(くに)
　この地プロヴァンス。
　恋と青春
　花と小鳥に満てる故郷(くに)
　ああ，天国よ，神の国」。[4)]

今までに，多くの学者が指摘してきたように，オーバネルの女性賛美の詩は，大別して，ザニー Zani (Jenny Manivet, 1825－1887) を偲ぶ初期の清純な恋愛詩と，「アルルのヴィナス」（*'Venus d'Arle'*, 1868）に代表される中期以後の官能的な詩に分類される。しかも後者の詩は，概して，戯曲『牧人』（*"Lou Pastre"*,1935）の第一幕第三場に見るように，

「我が肉体（にく）の血潮の炎（ほむら）　すべてこれ
　心頭（あたま）にのぼり，…雄羊か　雄山羊のごとく
　乙女目がけて　われ飛びかかる」[5)]

ほど強烈であった。詩人の孫エドワール・オーバネル（Edouard Aubanel, 1901－70）は，詩人の生涯を，「ザニーに対する実現不可能な恋愛の悲劇（ドラマ）と，芸術的欲求および宗教的欲求との間で分裂した意識の悲劇（ドラマ）」と規定した。このように，青年期にザニーに対する恋愛に苦しんだ詩人は，中期以後は芸術と宗教の対立，抗争による悲劇（ドラマ）の犠牲となった。しかも詩人の内面的苦悩は，彼の赤裸々な人間描写の詩に集中された外部からの非難・攻撃によって，さらに増幅されて，死期を早める結果ともなったのである。

ところで本論では，オーバネルが偉大な敍情詩人であるのみならず，以下に詳述するように，アルテュール・ランボー（Arthur Rimbaud, 1854－1891）の言う「見者」voyant として卓見をもって現代を予見し，かつきわめて大胆で適切な解決策を提示した点に注目したい。こうした意味で，筆者は，20世紀前半にフランスの知性を代表した詩人ポール・ヴァレリー（Paul Valéry, 1871－1945）同様，オーバネルを「プロヴァンス語による，唯ひとりの，真の詩人」（'le seul vrai poète provençal', 1877年5月15日付，ポール・ドムニー宛書簡より）として賛美したいのである。

第一次大戦後，オーストリアのクーデンホフ・カレルギー（Coudenhov Kalergi,1894－1972）によってヨーロッパ共同体の結成の必要が提唱されたが，1930年代の世界的大不況のあおりを受けて流産した。第二次世界大戦後，ようやくこの提案が実を結び，1986年にはヨーロッパ共同体（Communauté européenne）の加盟国は，12か国を数え，いくたの見るべき成果があがりつつある。

しかしこのヨーロッパ共同体の形成とは裏肚に，ヨーロッパ各地に，「少数民族による連帯意識」（identité ethnique）が高まり，地方の自治や自主独立を希求する運動が起っている。こうした運動は，四面海に囲まれ，ほとんど単一民族から成るわれわれ日本人には無縁に近い。しかし国の数以上に民族の数の多いヨーロッパでは，国として独立したものや，自治権に限って獲得したものが存在するほかに，今日なお国家権力とはげしく対立し，流血の惨事を繰り広げている地域もある。

19世紀中葉，詩人オーバネルが同僚のミストラル（Frédéric Mistral 1830－1914）やルーマニーユ（Joseph Roumanille,1819－1891）等と共に創設した，南仏プロヴァンス語・プロヴァンス文学復興運動フェリブリージュ（Félibrige）も，フランス革命の洗礼を受けて起こった一種の民族自決運動と見ることができる。フェリブリージェの中心人物の一人ミストラルは，自伝『青春の思い出』（*"Moun Espelido, Memòri e Raconte"*,1906）の中で，次のように述べている。

「当時（1851年）21歳だったわたしは…アルピーユの山並みを仰ぎながら，心に深く期したことがある。それは次のようなことだった。第一に学校が強行してきた誤った教育によって，プロヴァンスの民族的

感情は今や壊滅している。われわれはこうした教育を改革して，民族独立の感情に目覚め，これを育成し，助長して行くこと。第二に，こんにち学校が躍起になって絶滅しようとしている，先祖伝来の郷土固有の言語を復活して，民族感情の伸長に資すること。第三に，新しい詩作品の創成に努めて，プロヴァンス語の興隆をはかること」。[6)] 上の記述を要約すると，次のようになる。

1）民族独立の感情の育成と助成

2）言語の復活

3）文学活動の高揚

1859年ミストラルが敍事詩『ミレイユ』（*"Mireio"*,1859）を，その翌年にオーバネルが叙情詩『笑み割るるざくろ』を刊行したことは，上記のミストラルの抱負の一端が実現されたことを意味し，創設間もないフェリブリージェの幸先よい出発であった。しかしこの時から，フェリブリージュの二人の巨匠ミストラルとオーバネルの間にはすでに触れた「少数民族の連帯意識」をめぐって，急速に意見の対立が生じるのである。ミストラルはプロヴァンスの民族的自主独立を主張し，オーバネルはプロヴァンスの文化的自立と存続を高唱することによって。

ここでミストラルの政治活動を，『ミレイユ』の出版から普仏戦争（独仏戦争，1870-1871）までの約10年間に限って，略述したい。

ミストラルは『ミレイユ』の刊行によってホメロスの再来と称えられたが，彼は，『ミレイユ』刊行の二年後，オード「カタロニア詩人へ贈る」（*'I Troubaire Catalan'*）の中で，スペイン東南部カタロニア地方がプロヴァンス地方と呼応して，政治的に自立する必要性を力説している。

その後ミストラルは，しだいに連邦共和主義を信奉するようになり，1865年にはボナパルト・ワイズ（William Bonaparte-Wyse, 1826－1892）に南フランスの歴史的・風土的特色を強調し，南フランスをフランスの連邦国家にする必要を力説する一方，同僚ルーマニーユやオーバネルに愛国心の欠如を慨嘆している。

翌1866年１月に完成を見た敍事詩『カランダル』（*"Calendau"*, 1867）は，作者ミストラル自身が語るように，「中央集権と画一主義に対する闘争的理念の延長であり」，この政治的理念は既出のオード「カタロニア詩人に贈る」や，プロヴァンスをフランスの中央集権からの解放を高唱するオード「伯爵夫人」（*'La Coumtesso'*, 1866年８月）でも強調されるのである。

同年夏ミストラルは，カタロニア地方の共和連邦主義者で，詩人兼政治家ヴィクトール・バラゲ（Victor Balaguer 1824－1901）の訪問を受け，バラゲと思想的一致を見たことは，ミストラルを大いに力づけるに至った。

翌1867年は，ミストラルにとっても，また「フェリブリージュにとっても最良の年」であった。５月末，ミストラルの政治観に賛同するボナパルト・ワイズが私財を投じて，アヴィニョンとヴォークリューズの湧井（わくい）のほとりで，プロヴァンス・カタロニア合同の会議を開催したことや，７月末にカタロニアの亡命詩人たちが，ミストラル等の厚遇に感謝して銀盃（*Coupo Santo*）を贈ったことなどは，ミストラルを大いに喜ばせた。彼が「南仏のマルセイエーズ」の綽名（あだな）を持つ「銀盃の歌」（*'La Coupo'*, 1867年８月）を作成したのも，彼自身の抱く政治上の理想の現実される日の近いことを信じていたからであると思われる。

しかしそれも束の間のことであった。翌1868年ミストラルは，パリ大学教授サン・ルネ・タイヤンディエ（Saint-René Taillandier, 1818－1879）およびパリ在住の新聞記者ユージェーヌ・ガルサン

（Eugène Garcin, 1831−1969）から，分離独立主義者（séparatiste）としてはげしく非難されたのである。皮肉なことにも，前者はフェリブリージュ発足当初モンペリエ大学教授としてミストラル等に絶大な好意を寄せた人物であり，後者はフェリブリージュ創設に貢献するところの大きかった同志の一人だったのである。ミストラルは形勢不利と見たためか，愛国的な詩「アルコレ橋の鼓手」（*'Lou Tambour d'Arcolo'* 6月）を発表して，プロヴァンスの人びとは，誰もがフランス国民であることを強調したばかりか，サン・レミーにカタロニアの詩人たちを迎えて開いた宴席では，明らかに思想的変節としか受け取れない歓迎の辞を述べたあと，次のように言葉を結んだ。

「私たちの子孫が故郷の言葉を話すことを熱望し，合わせて…私たちの姉妹カタロニア，私たちの女友達スペイン，私たちの母なるフランスの栄光のために乾杯」（ジャン・バティスト・ゴー宛の1870年8月28日付けの手紙）。

1870年7月，普仏戦争が勃発し，フランスの敗色は日々に濃くなった。ミストラルは敗戦の原因は，人びとが進歩思想にかぶれるあまり，宗教や伝統を軽視することにあると主張した。こうした主張は，戦争中に急速に高まった国家主義を反映してミストラルが，「共和主義的連邦主義者から君主主義的連邦主義者に変貌した」ためであると酷評された。フェリブリージュの詩人たちと親交のあった象徴派詩人ステファーヌ・マラルメ（Stéphane Mallarmé, 1842−1898）が，ミストラルにあてた同年9月4日付の手紙の中で，「プロヴァンスで共和国を宣言するのはあなたの務めであるが，情勢はつねに裏肚である」と述べているのは，先見の明に欠けたミストラルを揶揄するものと解される。

以上，私たちは，1860年から1870年までのミストラルの政治活動を概観した。それでは，同じ期間オーバネルの動静はいかなるものであったであろうか。

オーバネルはザニーとの恋愛を珠玉のような美しい作品に結晶化したのちも，フェリブリージュ運動にたずさわったが，政治面ではミストラルやルーマニーユほど興味を示さず，純粋な敍情詩人，劇作家として創作に専念した。すなわち，『笑み割るるざくろ』を刊行した翌年（1861）に結婚したジョセフィーヌ・マザン（Joséphine Mazen, 1841−1911）や，意中の恋人として十年間詩人に限りない詩泉をもたらしたフランス駐在のロシア外交官の令嬢ソフィー・レンツ（Sophie Lentz）をテーマに作詩に努める一方，情欲に翻弄される人間を描いた戯曲『罪のパン』（*"Lou Pan dóu Pecat"*,1863年脱稿，1882年出版）や『牧人』の創作に力を注いだ。その間，アルフォンヌ・ドーデ（Alphonse Daudet, 1840−1897）と知己を得た（1861）こと，特にステファーヌ・マラルメと親交を結ぶことのできた（1864）ことは，純粋に文学を愛したオーバネルにとって，この上もない幸いであった。

以上の理由から，オーバネルにとって，1862年フェリブリージュの目的と抱負を明確にする「規約」が決定された際に出納長に任じられ，また1876年「規約」改定によってプロヴァンス支部長に選出されたことは，さほどうれしいことではなかったように思われる。またカタロニアの亡命詩人がプロヴァンスを訪れた時，オーバネルはミストラルやルーマニーユのよう熱烈な歓迎ぶりを示さなかったことも容易にうなづくことができよう。

しかし1870年，普仏戦争でフランスの敗色が濃厚になるとオーバネルは，後述するように，いわば象牙の塔を出て，積極的に所信を披瀝するのである。そして，彼が「いとしい女（ひと）」（Mignon）ソフィー・ド・レンツ嬢にあてた次の手紙（1870年9月27日）では，祖国フランスを愛するプロヴァンス

の詩人としての心痛を余すところなく表明している。

「祖国（フランス）。…私は不幸と流血の時ほど，この気高い言語（プロヴァンス語）の持つ魅力と慈しみを知ったことは一度もありません。私たちは祖国を母のように，ほとんど神のように愛し慕うのです」。

またオーバネルは，マルセイユにコミューヌの起こった時（1871年３月末－３月始め）も，祖国フランスの将来を憂い，「いとしい女」に苦悩を訴えている。

「フランスは傷められ，引裂かれ，血まみれなのです。私はそれを思うだけでも，大粒の涙が瞼に溢れるのを覚えるのです。リラの花に薫る大気も，また小鳥のかなでる歌も，私の心の痛手をけっして癒してはくれないのです」（1871年４月15日付け手紙）。

1874年７月，ペトラルカ（Francesco Petraca, 1304－1374）死後五百年祭がアヴィニョンとヴォークリューズで挙行された。祭典には，イタリア大使ニグラ伯（Contantino Nigra,1828－1907）が出席した。フランス政府は，長年緊張していた仏伊関係を緩和し，あわせて「ラテン系諸国を支配下に入れようとするドイツ政府の陰謀の鼻をくじく」ものとして歓迎した。この祭典では特に注目すべきことはオーバネルが，フランス当局からフェリブリージュが分離独立主義運動として非難されるのを反論した点である。たとえばオーバネルは，７月19日，ヴォークリュズ県主催の宴会の席上で，次のように語っている。

「自分の生まれた土地や故郷を愛することは，生まれた家を愛するように神聖なものであります。…ふるさとのプロヴァンスを，またドフィネを愛する者はフランスを愛する者であります。ちょうど生みの母を愛する者が神を愛するのと同じなのです。愛がなければ，すべては滅びてしまうのです」。[7)]

なおこの会においてオーバネルは，「ペトラルカの生涯と恋愛詩の歴史」と題する注目すべき講演を行い，その結びの部分で，以下のように力説している。

「諸君，諸君はプロヴァンス語が死滅したとでも思っているのではありませんか。…諸君はプロヴァンス語がよみがえったのを知らないのですか」。[8)]

これは，オーバネルが吟遊詩人の伝統を持つプロヴァンス語の栄誉と，それを受けつぐ詩人たちの誇りを高唱するものとして興味深い。

以上のオーバネルの発言は，ミストラルの顰蹙を買ったものと思われる。その翌年５月，ミストラルは，３年後に開催を控えた万国博覧会（1878）に協賛を求められると，博覧会への協賛は，「過去30年間，南仏の独立のために払ってきた努力が水泡に帰する」という理由で，協賛を辞退しているからである。

1875年９月，フォルカルキエでフェリブリージュの詩文会が挙行された。この会で特に異彩を放った

のは，オーバネルが，フェリブリージェを分離独立主義運動と見て危険視するフランス政府を，次の点から非難したことである。

1）　フェリブリージェの同志たちは，フランスを愛するフランス人である。

2）　伝統あるプロヴァンス語とプロヴァンス文学の顕揚は，フランスを豊かにする。

しかし同年12月，当時アカデミー・フランセーズの会員であったサン・ルネ・タイヤンディエは，『両世界評論誌』に掲載された長文の論文の中で，ミストラルの分離独立主義をきびしく攻撃するのである。

そういった情勢の中にあってオーバネルは，「いとしい女（ひと）」ソフィ・ド・レンツ嬢に，祖国愛について，次のように述べている。

「それは，すべてのものをパリの中へ押し込めようというのではありません。祖国フランスのすべての民族が，それぞれ自分たちの郷土と古い言語と伝来の習俗を誇り高く，愛情をもって堅持することを条件に，一つの枠の中にしっかり組み入れようとする高邁な精神なのです」（1877年１月22日付の手紙）。

上掲のオーバネルの見解は，当時のフランスの国内事情にかんがみて主張できる「少数民族の連帯意識」の限界と言うことができるであろう。

ところで1876年，フェリブリージェの運動に呼応して，パリに「蟬の会」（*La Cigalo*）が設立された。この会は，パリ在住の南仏出身の文学者，芸術家，学者たちの親睦をはかり，あわせてパリと南仏との関係を緊密にしようとして発足したものである。またその翌年４月に，フェリブリージュが正式に公認団体として認可されたことはフェリブリージェの歴史上特記すべき事実であり，ミストラルは「ヴィレル・コトレ勅令（1539）の発令以来はじめて，正式の法令によってわれわれの言語を擁護する権利が認められた」と語っている。しかしこの頃から，南仏各地の共和主義者や社会主義者や反教権主義者たちが，フェリブリージェの保守反動性に強く反発し，オーギュスト・マラン（Auguste Marin, 1860－1904）を中心とするマルセイユの海浜派（*Escolo de Mar*）や，ルイ・グザヴィエ・ド・リカール（Louis–Xavier de Ricard, 1844－1911），オーギュスト・フーレース（Auguste Fourès,1848－1891）を中心とするトゥールーズのラングドック派，揚げ雲雀（*La Lauseta*）など，いわゆる「左翼のフェリブリージュ」が結成されたことは見逃すことができない。

こうした傾向はさらに強化され，翌1878年は「動揺と論戦の年」と呼ばれる一年であった。　まず同年１月にミストラルは，彼を，聖職至上主義者として非難する『連邦主義』（“Fédéralisme”, 1877）の著者ルイ・グザヴィエ・ド・リカールに対して抗弁している。また５月には，モンペリエで開催されたロマン語学会とラテン祭に出席して，ラテン民族の統一を理想と謳う「ラテン民族に捧げる」（*'Ode à la Raço latino'*）を朗読し，席上，聴衆から分離独立主義者と非難された。ちなみに，この時催されたラテン祭で上演されたオーバネルの戯曲「罪のパン」は，大成功を収めたのである。

同年（1878）10月，パリで「蟬の会」が開かれた。会に招待されたミストラルは，リプランディー（Claude Liprandi）によれば，「バビロニアへ赴いて，畜生の前で頭を下げるのを快しとせず」に欠席した。結局会に出席したのは，オーバネルと同僚のルミュー（Louis Roumieux, 1829－1894）とグラ（Félix Gras, 1844－1901）等であった。会の席上でオーバネルは，ミストラルが，辞典作成に追わ

れて出席できなかったと弁護している。

さてパリで開かれた「蟬の会」で，席上，パリ大学教授サン・ルネ・タイヤンディエは，自分がフェリブリージェの創始者であるのに，フェリブリージェの詩人たちは自分の敷いた路線を進まないばかりか，かれらはこぞって分離独立主義者である。…なお悪いことにミストラルはフランスの欠点を根掘り葉掘りして攻撃してくると咎めた。

フェリブリージュを代表して会に臨んだオーバネルは，自由主義者，反分離独立主義者の立場から，フェリブリージュの起源とその使命について，刮目に価する講演を行って，みごとに反論した。その講演の中で，本論のテーマにもっとも関わりのある主要な部分を紹介して，「見者」オーバネルを理解するための一助としたい。

「私たちは自分たちの言葉を愛します。自分たちの言葉は生まれ故郷の事物をきわめて正確かつ魅力あるものに表現するからであります…」[9)]。

「私たち（南仏人と北仏人）は出生・感情そして芸術を愛する点で兄弟であります。なぜ言葉が問題なのですか。なぜ方便が問題なのですか。要は心が大切なのです。私たちの心は祖国，すなわち，フランスにあるのです。…フランスに，もろもろの言葉のうちの一つを保存することによって，フランスに富の一つを，力の一つを保存することになります。私たちは子供たちに故郷の村々を大切にし，愛することを教えることによって，偉大な祖国を大切にし，愛することを教えることになるのであります」[10)]。

「フランス語を正確に話すこと，そしてプロヴァンス語を忘れないこと。これが私たちの目的です。…『フランスは偉大なるがゆえに二つの文学を有する』と発言されたフランス文学の巨匠のひとり，ヴィルマンとこの点で同意見であることを幸福に思います」。[11)]

以上のようにオーバネルは，フェリブリージュの理想を披瀝することによって，サン・ルネ・タイヤンディエと文部大臣バルドゥー（Agénor Bardoux, 1829－1897）の非難をかわし，最後に，

「われわれ祖国，フランスのために！」[12)]

と高らかに叫び，盃を干したのである。

予想通り，ルーマニーユに組する数種の新聞が，「蟬の会」の催しは「言語同断」であり，オーバネルは「痛飲乱舞のあと，マルセイエーズをわめいた」などと酷評した。

同年12月末，フェリブリージュの会がアルルで開かれた。オーバネルは２カ月前パリで開催された「蟬の会」で行った講演の内容を報告したのち，その反響を紹介した。オーバネルは自分の本心を正確に伝えるものとして≪メモリアル・デックス紙≫（«Mémorial d'Aix»，11月第３号）の，次の一節を朗読した。

「彼（オーバネル）は星雲の中の一つの星を輝かしたと同時に，かれらの目的を明確に定義し，さらに

かれらの正当な希望を公表することによって，今まで受けていた分離独立主義者というばかげた謗(そし)りを雲散霧消させた」。

その上，オーバネルは報告を次の言葉で結んだ。

「梟(ふくろう)は鳴くにまかせればよいのです。
あとは神の思し召しのままにしましょう」[13]。

ところが年来のライバル，ルーマニーユが叫んだ。

「オーバネルというこの男は，なにをぼやきに来たのだ」[14]。

それにつづいてミストラルが大声でどなった。

「きみはプロヴァンスを裏切ったのだ」[15]。

このようにルーマニーユとミストラルは，口をきわめてオーバネルを面罵した。オーバネルは居たたまれなくなり，席を蹴って退場したのである。

以上の経緯を見ても，1878年は「動揺と論戦」に明け暮れた一年だった。

それから数日後の1879年１月２日，パリではアルフォンス・ドーデの司会のもとで，「蟬の会」が開かれた。席上ドーデは，年末にオーバネル等が「蟬の会」に出席したことに対して謝辞を述べ，オーバネルには陶芸家レオン・パルヴィエ（Léon Parvillé）に大皿の製作を依頼して，それを贈ることに決定した。

２月10日，オーバネルはマルセイユの新聞≪プティ・マルセイユ≫（«Petit Marseille»）に一文を投稿した。それは，ミストラルがパリの「蟬の会」の文学担当委員会の委員長アンリ・ド・ボルニエ（Henri Bornier, 1825—1901）に宛てて書いたアルル事件に関する手紙が，１月16日付けの同紙に掲載されたのを見て，事件の顛末を「正確に」公表しようとしたためである。

ここに至ってミストラルは形勢不利と知り，５月のフェリブリージュの総会（聖エステール祭の当日）では，オーバネルのプロヴァンス地区支部長の地位を剝奪したのを機会に，みずからも年来の分離独立主義を放棄するのである。

一方オーバネルは，フェリブリージュから手の切れたことで精神的にも落ち着きを取りもどして，叙情詩集『アヴィニョンの娘たち』（*"Li Fiho d'Avignoun"*,1885）の出版をひそかに進めていた。

10月オーバネルは，パリ郊外のソーで開催された南仏出身の作家フローリアン（Jean-Pierre Claris de Florian, 1755－1794）を記念する祭典に出席し，席上，次のように演説した。

「詩は普遍的な言葉であります。…詩は恋愛に似ています。詩は国を持たないのであります。…フランスは母，敬愛する母であります。…プロヴァンスの詩人たるフェリブリージュの詩人たちも，またパリの詩人たる『蟬の会』の詩人たちも，皆フランスのために歌うのです」。[16]

以上のようにオーバネルは，生まれ故郷プロヴァンスを無上に愛し，プロヴァンス語の保存とプロヴァンス文学の高揚を熱望したが，一方では

「南仏のつつましい歌は，コルネイユやユゴーやラマルティーヌやミュッセのような偉大な詩人たちの用いた言語（フランス語）を消滅させることが出来るはずはない」[17]（1878年10月24日「蟬の会」での講演）

と信じた。こうした意味でもオーバネルは，分離独立主義者ではなかった。とは言え，プロヴァンスから伝統ある言語と文学，さらにはその習慣や自由をも奪い去ろうとする中央集権には極力反対した。「均等化した水準は，すべてを低下させ，無気力にさせ，消滅させる」（1877年１月22日付けミニョン宛）からである。しかもオーバネルが終生強調したのは，母国語であるプロヴァンス語の保有ということであった。

「私たちは，自分たちの言語をたくましい生命を持ったものにしなくてはなりません。プロヴァンスの人びとよ，フェリブリージュの偉大な詩人が言った次の言葉を十分思い出して欲しいのです。

自分の言語を保有する者は，
桎梏（しこく）を解き放す鍵を保持する」[18]（1875年９月11－14日，フォルカルキエでの講演）。

それでは，オーバネルが上記のパリの「蟬の会」で，記念すべき講演を行った1878年12月以降，フェリブリージュの理事長ミストラルの動静はいかなるものであったであろうか。それを年代的に追って行きたい。

まず翌1879年３月，ミストラルは数年来，中央，地方の新聞雑誌等によって，「反動主義者・フリーメンスンの団員・分離独立主義者」などと非難されてきたが，今後，こうしたことには一切取り合わないことを決意したという。

同年５月，ミストラルがアヴィニョンの聖エステール祭において，年末の分離独立主義を破棄したことは，すでに述べたとおりである。

それから３年後の1882年５月，ミストラルは南西フランスの都市アルビで開かれた聖エステール祭で，『郷土愛』（*'L'Estancamen au Terraire'*）と題する講演を行い，その中で，フランスの中央集権を非難しながらも，南仏がつねにフランスと一体であることを力説している。

11月末ミストラルは，マルセイユで『フェリブリージュと日輪の帝国』（*'Lou Felibrige e l'Empèri dóu Soulèu'*）と題して講演し，

「パリ，偉大なパリはつねに分かち難いフランスの首都であり…マルセイユは…光りと平和と詩歌の帝国，フェリブリージュの詩人たちが『日輪の帝国』と呼ぶ国の輝かしい首都であります」[19]

と述べた。ミストラルの本心は，マルセイユを首都とする平和で，文化水準の高い帝国，ないしは連邦の建設を夢見ていたように思われる。

それから２年後の1884年５月中旬，ミストラルはフランスが「国語の名において，地方語を破壊す

る」と強調しながらも，それから一週間後には，パリ郊外のソーで開かれた「蟬の会」では『プロヴァンス語』（*'La Lengo prouvençalo'*）という表題のもので，次のように語っている。

「ああ，フランスよ，母なるフランスよ。かくも美しい言葉（プロヴァンス語）をもって，汝を母と呼ぶこの言葉を，汝のプロヴァンスを，汝の美しいプロヴァンスに保存せよ」[20]。

このようにミストラルは，数年前までオーバネルが「プロヴァンスを裏切った」として酷評しておきながら，オーバネルが終始主張していた考え方に急速に近付いた。そして彼が，以下に示すように，1890年5月モンペリエの聖エステール祭で，すでにオーバネルが事あるごとに高唱していたのと全く同じ主旨の講演を行った時には，すでにオーバネルこの世を去って4年後のことであった。

「言語のために戦うのは，個人的な栄光を目標にしたり，文学的趣味を満足させるためではありません。…それはまさに民族の言語には民族の魂があるからです。…しかし私たちは，フランスをこよなく愛し，一旦緩急あれば祖国防衛のために鋤を捨て，仕事を捨てるにやぶさかではありません」。

筆者は，この小文の冒頭に，第2次世界大戦後ヨーロッパ共同体の成立と発展のかげに，「小民族による連帯意識」（indentité ethnique）が年を追うごとに盛んになって来ていることを指摘した。国によっては，政府の権力が国内の少数民族の言語や習俗を抹削しようとし，そのため流血の惨事がしばしば起こっている。

ところが世の道学先生たちによって肉体讴歌の詩人よばりにされたオーバネルは，すでに今から100年も以前に，「見者」voyant として，国家と民族の問題，言語と文化の問題などについて，予言的な示唆に富む卓見を事あるごとに披瀝した。ミストラルはオーバネルの世を去るまで，オーバネルの真意を曲解し，一貫性の欠けた言辞を吐きつづけた。共に手を携えてフェリブリージュ運動を始め，一方は叙情詩人，他方は叙事詩人として数かずの不朽の作品を発表して故国プロヴァンスの顕揚に多大に貢献をしたにもかかわらず，袖を分かつ結果となった。これは，ミストラルの蔭に，詩人として無能でありながら，オーバネルを排除してフェリブリージュ内で枢要な地位を確保しようとしたルーマニーユの画策のあったことは否めない。

注

1）*La vido es ansin : ome,femo, / Fau sèmpre, fau tóuti soufri,/*
E paga, pèr forço lagremo, / Un pau de joio, e pieï mouri!

2）*I'a qu'uno joio vertadiero / En aquest mounde tant catiéu,!*
Mai aquelo èi senso pariero./La joio de t'ama, moun Diéu!

3）*e pèr iéu i'a rèn de béu, de sublime, de devin coume d'ama!...Eh! Bèn, crèses-n'en ma paraulo, li tres flamo de moun cor saran toujour pèr Diéu, la patrio e la femo!*

4）*Oh! pèr lou cor queto chabènço / Qu'aquesto terro de Prouvènço / Pleno d'amour e jouvènço, / Pleno de flour, pleno de nis, / Terro de Diéu, o paradis!*

5) *Tout lou sang, tout lou fiô de moun cadabre afloco / A ma tèsto... Coume un aret, coume un bou, iéu, / Iéu pèr uno piéucello aro me batriéu.*

6) *E aqui meme,—d'aquelo ouro aviéu vinto-un an,—lou pèd sus lou lindau de moun mas peirenau emé lis iue vers lis Aupiho, entre iéu e d'esper-iéu prenguère la resoulucioun : proumieramen, de releva, de reviéuda'n Prouvènço lou sentimen de raço, que vesiéu s'avali souto l'educacioun contro naturo e fausso de tóuti lis escolo; segoundamen, d'esmôure aquelo respelido pèr la restauracioun de la lengo naturalo e istourico dóu païs — que tóuti lis escolo ié fan uno guerro à mort; tresencamen, de rèndre la vogo an prouvençau pèr l'aflat e la flamo de la divino pouësïo(XI La Rintrado au Mas).*

7) *l'amour de sa terro, de sa prouvinço, es sacra coume l'amour de l'oustau peirau. A coumprès que quau amo sa Prouvènco o soun Doúfinat amo la Franço, coume quau amo sa maire amo Diéu, e que, quand i'a plus d'amour, tout cabusso.*

8) *La lengo prouvençalo, la cresias morto, parai! ...Mai vèses pas que ressuscito!*

9) *E l'aman, nosto lengo, dóumaci nous dis vertadieramen e poulidamen li causo dóu caire natau.*

10) *Sian fraire pèr la neissènço, fraire pèr li sentimen, fraire pèr l'art... Qu'enchau la lengo? Qu'enchau l'óutis? La questioun es mai auto; es l'amo que fau vèire, e nosto amo es à la patrïo, à la Franço!... en counservant à ra Franço uno de si lengo, ié counservan uno de si richesso, uno de si forço.En ensignant à nòstis enfant lou respèt e l'amour de si vilage, i'ensignant lou respèt e l'amour de la grando patrïo.*

11) *Parla puramen lou francés e noun óublida lou prouvençau : vaqui nosto toco, e eici siéu urous de me rescountra em'un di mèstre de la literaturo franceso, emé l'ilustre Villemain que disié :* "La France est assez grande pour avoir deux littératures."

12) *A la Franço, nosto Patrïo!*

13) *Fan laissa miaula li machoto/ E laissa faire lou bou Diéu!*

14) *De que vèn brama aquéu M. Aubanel!*

15) *Avès trahi la Prouvènço!*

16) *La pouësio es la lèngo universalo... La pouësio es coume l'amour, a ges de patrïo... la Franço es la maire, la maire adourado! Felibre, Cigalié, pouëto de Prouvènço de Paris, cantan pèr elo.*

17) *crese pas que li cansouneto de l'auceliho miejournalo amosson jamai la voues sublimo d'aquélis aut cantaire que res amiro mai que nautre!*

18) *E de mai gardaren ansin toujour vivènto e forto nosto lengo; e souvèn-te bèn, o pople de Prouvènço, de ço qu'a di lou grand felibre:*

Quau tèn sa lengo, tèn la clau
Que di cadeno lou deliéuro!

19) *Paris, lou grand Paris sara toujour la capitalo de la Franço indivisiblo... Marsiho devendra... la capitalo resplendènto d'aquel empèri de lumiero, de pas, de pouësio, que li Felibre apellon «I'Empèri dóu Soulèu!»*

20) *O Franço, maire Franço, laisso-ié dounc, à ta Prouvènço, à toun poun poulit Miejour, la lengo melicouso ounte te dis : Ma maire!*

参 考 文 献

1）Oeuvres complètes de Théodore Aubanel, éditées et annotées par Claude Liprandi, publiées chez Aubane

Tome Ⅰ－Poésie : *"La Miéugrano entre-duberto"*－*"Li Fiho d'Avignoun"*－*"Lou Rèire-Soulèu"* (1973)

Tome Ⅱ－Théâtre : *"Lou Pan dóu Pecat"*－*"Lou Raubatòri"*－*"Lou Pastre"* (1975)

Tome Ⅲ－"Feuilles Perdues" (1983)

Tome Ⅳ－"proses" (1984)

Tome Ⅴ－"Brindes et Discours" (1985)

Tnme Ⅵ－"Lettres à Mignon" (1987)

Tome Ⅶ－"Ce Coeur qui ne change pas" (1987)

2）Oeuvrages spéciaux

Frederi Mistral : *"Mireio"*, 1859.

Eugène Garcin : "Les Français du Nord et du Midi", Didier, 1868.

Frederi Mistral : *"Moun Espelido, Memòri e Raconte"*, Plon－Nourrit, 1906.

杉　冨士雄著『南仏叙情詩人テオドール・オーバネル』大修作書店　(1960)

杉　冨士雄著『ミストラル「青春の思い出」とその研究』福武書店　(1979)